



成隣だより

平成26年 11月 1日
第 7 号
昭島市立成隣小学校
校長 長 野 基

共感できる心

校長 長野 基

「運動会感動しました！！」という話を閉会式ですてから、もう1ヶ月が経ちました。朝晩はめっきり寒くなり、木枯らし1号も吹きました。通勤の電車では、ダウンのジャンパーを着ている人を目にするようになりました。昼間の太陽の日差しに汗ばむ日もあり、寒暖の差の変化にいくらか体調を崩しかけている人が増えてきました。保護者、地域の皆様はいかがお過ごしでしょうか。くれぐれもご健康にご留意ください。

さて、10月の全校朝会で、『共感』ということについて話をしました。少し難しかったかもしれませんが。学校だより10月号で〇〇の秋について、6年生の第1位がスポーツの秋でした。運動会に全力で取り組んだ6年生ならではの秋でした。そして10月は読書の秋、学習の秋でした。11月は展覧会に向けて、最後の追い込みとなります。もちろん芸術の秋ですから。

子供たちは、図工の授業で自分の作品完成に向けて、生き生きと制作活動をしています。全員の作品が並んだ時のことを考えると、今からワクワクしています。お互いの作品を鑑賞しながら、何を思うのでしょうか。

先日、休み時間に校庭で遊んでいた1年生の女の子が、転んでケガをして膝から血を流していました。すると近くにいた2年生の女の子が「大丈夫？」と言いながら、その1年生の子の膝に自分のハンカチをさっと当ててくれました。また、3年生の男の子が「大丈夫？痛くない？保健室に行こう。」と言って、保健室まで付き添ってくれました。

2人の取った一連の行動は、とても感動的でした。人が困っているときに、自然にその人のことを考えてあげられる成隣の子、嬉しいですね。

人が悩んでいたり苦しんでいるときに、その人に成り代わることはできません。だから、その人の本当の苦しみはわからないし、その人の代わりに解決してあげることもできません。私たちができることは、その人の怒りや悲しみ、嘆きや苦しみといった、その時の気持ちに寄りそってあげることです。つまり『共感できる心』があると、その人の思いに近づくことができるのです。自分の心を最大限に働かせて、その人の心の中を覗いてみたり、心の声を聞いてみたりしてわかろうとすることが大切なのです。

もちろん嬉しいときには一緒に喜び、やり遂げたときには一緒に感動することが大事です。今、展覧会に向けて一生懸命作品を作っています。出来上がった作品を見て、この作品はどんな思いで作られたのだろうと考えると、その人の気持ちが伝わってくるかもしれません。私たちは日常生活において、周りの人のことや自然界の出来事について、何気なく通り過ぎていく場面がたくさんあります。一瞬立ち止まって、近くにいる人の気持ちを考えてみたり、近くで起きていることを感じてみてはいかがでしょうか。

「猫の子の ちよつと押える 木の葉かな」

これは小林一茶の句です。意味は、はらはらと風に舞いながら木の葉が散ってくると、子猫がじゃれるようにちよつと手を出して押えている、ということです。何を感じますか？

